明治三十八年一月八日發行

明治三十七年五月七日第三種郵便物認可

愛をもて眞理を行ひ長ちて
凡てのこと首なるキリスト
に效はしめんためなり(以弗所四〇十五)

第二巻第四號

基督教女子青年會とは何ぞや(二) 社説
聖書研究＝アブラハム シー、エー、コンヴアース孃
米國に於ける夏期會合 エッチ、エム
雜錄

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

明治の女子

『明治の女子』は日本基督敎女子青年會の創立委員が發行する月刊の聖書研究録なり。
『明治の女子』は一年分十二冊の定價郵税を併せて金五十錢。
發行所は東京市麹町區土手三番町十五番地
日本基督敎女子青年會の創立委員は

委員長 ホイットマン孃
幹事 ワイコフ孃
ワージントン孃
ウエストン孃
津田(梅子)孃
花井夫人
ヘルム夫人
フィシャー夫人
平野孃
小崎夫人
エリス孃
ソーバー孃
フェルプス孃
ハミルトン孃
トリストラム孃
ザーフルー孃
佐藤(錦子)孃
河井(道子)孃
モリソン孃
萬國基督敎女子青年會日本支部幹事 エー、シー、マクドナルド孃
同上

明治三十七年七月廿八日印刷 〔定價 一册四錢 郵税五厘〕
明治三十八年八月一日發行 〔一年分(十二册)郵税共五十錢〕

東京市麹町區土手三番町十五番地
發行兼編輯人 テー、イー、モリソン
東京市京橋區築地二丁目二十番地
印刷人 河本龜之助
東京市京橋區築地二丁目廿一番地
印刷所 株式會社國光社

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

明治の女子　第二巻第四號　明治三十八年七月一日發行

明治の女子

基督教女子青年會とは何ぞや（二）

我等は前號に於て、一般基督教青年會の沿革に就いて記するを得たり。これより特に女子青年會に關し、序を逐ひ、項を分ちて聊か述ぶる所あらんとす。

萬國基督教女子青年同盟

歐米に於ける本同盟は、世界的大運動の機關にして女子基督教信者が、一般の女子青年を基督に導かんがために設けたるもの也。その會員の種類の多方面なるその事業の範圍の多趣味なる、世恐らくはこの同盟に如くものなかるべし。神の聖旨にもとづいて、すべての女子青年が生理上、精神上、社交上に進歩發展すべきものたることは、本同盟の深く信ずる所也。

『汝心を盡し、精神を盡し、力を盡して、主たる汝の神を愛すべし』。これ本同盟がその根本主義として抱持する所也。會員は、基督教會の種々なる教派に屬すれども、耶蘇基督を以て、おのが救主となし、その神聖なることを認むるに於ては即ち一也。その事業は、すべての女子青年が、富めるも、貧しきも、教育あるものも、教育なきものも、學生も、職人も、互に相助け相勵まし、以て各自の生活をして、一層眞率なる、一層高潔なる佳境に進ましめんことを務むるに在り。

すべての女子青年のうちにて、我等が最も注意を要すべきは、女子學生の生活に在り。この時期に於ける指導、その宜しきを得ざる場合には、社會國家の不幸これより大なるものなけん。彼等が新しき理想にあくがれて、花の如き前途を望むの時、その快味の大なると共に、これに伴ふ危險も亦た決して小なりといふべ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

からず、これらの女子學生をして、よく神と交通を保ち、宗教的生活を樂ましむるは、目下の最大急務にあらずして何ぞや、若しそれ、かの孤獨頼るなきの少女、これ日も足らず勞役に服する女工、熱鬧紛料の裡に奔走する職人の如きに至つては、その狀情、實に憐むべきものあるを見る。彼等が時に人生の常なきをかこち、行路の難きを嘆ずるあるも、決して無理ならぬことゝいふべし。彼等をしてあたゝかき天の慰籍と、けだかき神の平安とを享受せしむるは、本同盟がその事業の主眼とする所也。

それ青年會の事業の最も發達せるは、英米の二國にして、この二國の宗教的運動に最も勢力を有するは即ち青年會也。過去七十年間に於て、特に學生間に最もよく傳道上の功果を收め得たるものも、この青年會の運動にてありき。就中、米國學生青年會の如きは、國中最も宗教的氣魄に滿てる團體にして、全學生中の二分の一は、皆な悉く基督信者なりと、是を以て之を觀れば、男女兩青年會の希望や、また實に大なりといふべし。

聖書研究

アブラハム

シー、エー、コンヴァース

（創世記十一〇廿六。廿五〇八）

いにしへの歷史に於て、アブラハムの如きは、我等の注意を惹起すべき第一流の人物也。聖書中の物語を見るに、彼の名到る處に現はる。げにアブラハムは偉人也。今彼の一生を研究して、その人物の偉大なる所以を學ばんことを勉むべし。

●一日　彼は如何なる稱號を得たりや。歷代史略下廿〇七。雅各書二〇廿三。以賽亞書四十一〇八、

耶蘇の友情に關する所見如何。約翰傳十五〇十四、十五。また約翰傳七〇十七及び詩篇二十五〇十四を參照すべし。

また彼が得たる他の稱號は何ぞや。加拉太書三〇七、九

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

神を悦ばすに最も必要なるものは何ぞや。希伯來書十一〇六。

アブラム。忠信たるもの－忠信なるもの丶父－神の友。

本月の研究に於て、我等はアブラムが信仰の發達の跡を尋ね、かつ何故彼が神の友と稱せられたるかを見んと欲する也。

請ふ、我等は自ら省みて、我等もかゝる稱號を得るの價値ありや否やを考ふべし。若しこの價値なくば我等は如何にして神が聖書の中になし給へる約束の完うせられんことを求むるを得んや。加拉太書三〇九、十四

●二日　創世記十一〇廿六－卅二。

彼の系統。十節。九〇廿六、廿七を讀め。

神は歴史の裡に一定の計畫を有し給ふや。アブラムの子孫が、後年カナン人をその約束の地より逐はざるべからざりしを記臆すべし。

アブラムの父、兄弟、妻、甥はだれ〳〵なりしや。

少時に於ける交友は如何。約書亞記廿四〇二、三、十四、創世記卅一〇十九。

備考。アブラムは偶像信者の中にありしかど、まことの神を信ずること厚かりしを以て、神はよくアブラムにみ語をかけ給ひ、彼亦たその命に從ふことを得たる也。かくの如く、我等はいかなる境遇に在るも、常に神と共に生活するを得べし。

ウルといふ處にて、アブラムはおのれを呼び給ふ神のみ聲を聞きて、これに從へり。

創世記十一〇卅一。使徒行傳七〇二－四。希伯來書十一〇八を讀め。アブラムは自らその向ふ處を知れりしや。創世記の記者はアブラハムの向ふ處を知りて、同節にこれを示したれど、アブラム自身に於ては、おのが目的の地を知らざりしが如し。

アブラムは神の命に從へり、されどその從ふや、些の逡巡する處ありしを見ず。使徒行傳七〇三『なんぢの國を出で、なんぢの親族を離れよ』。アブラムの

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

親族は、彼に對して如何なる妨を與へしや。馬太傳廿二〇卅七。馬可傳十〇廿九、卅を見よ。

我等は基督のために、すべてのものを捐てたるか、唯々としてその命に從ひつゝあるか。

●三日　創世記十二〇一ー八。

悔改の生活は隔離の生活なり。哥林多後書六〇十六ー十七。罪より隔離することいよ〳〵遂ければその信仰いよ〳〵高大にして、その發達も亦た著しかるべし。

アブラム故國を離る、されど彼はその父テラを伴ひて往けり。『彼等ハランに至りて、テラの死ぬるまでその處に住めり』。かくのごとくおのが、前途に横はる障礙の除去せられざる間は、到底進み行くこと能はざる場合、その甚だ尠からざるを見る。アブラム今やその故國を去り、またその父と別れたれど、尚ほロトを伴へり。我等は悔改以前の生涯に係はりたる事物が、今日のおのれにとりては、たしかに障礙となることを知りつるも尚ほよくこれをすて去るに忍びざる情あるを見る、アブラムに與へられたる約束の容易に信せられざりしは何故ぞ。その達せらるゝの期甚だ遠かりしを以て也。この約束は全地の諸民に及べり。アブラムの信仰によりて、全世界は神の祝福をうくるを得る也。記臆せよ、信仰の厚薄によりて、祝福を得、また祝福を失ふの人、その幾百千萬なるを知らざるにあらずや。我等は世に孤立することを得ず。我等の生活行爲は、多くの人々に向つて感化を與ふるもの也。單に知己に向つてのみならずその知己によりて感化を蒙るものにも及ぶ也。

この時に當つて、アブラム神に近づきゐたりしかば、神彼に現はれ給ひぬ。かくてアブラム祭壇をその前に築けり。創世記十二〇七、八。彼がロトを伴へるにも係らず、神は敢て彼を棄て給はざりき。げに神のみめぐみの鴻大なる、我等が柔弱にして、執拗なる時にも、尚ほよく我等を顧み給ふ也。

●四日　創世記十二〇九ー廿。

彼が途中相會せし二個の困難は何ぞ。十二〇六、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

九。この困難を逃れんがために、彼はいづこに行きしや。その行くや、神のみ心に從ひてなるか、はた己れの意によりてなるか。箴言三〇五—七を研究すべし。心をとめて以賽亞卅一〇一を讀め。(聖書中の物語に於て、埃及はこの世界を代表せるものなることを注意すべし)。神は時としておのれの民を埃及に遣はし給ふ。創世記四十六〇三、四。馬太傳二〇十三。

備考　神は我等をあしき世界に遣はし給ふとも、我等安全にその命に從ふことを得べし、何となれば神は我等と共に往きて、再び伴ひかへり給ふが故也。創世記四十六〇三、四。ヨセフ埃及に赴きて、害その身に及ばず。ダニエルまたバビロンに到りて安全なりき。アブラムの埃及に赴きたる結果、一の罪はまた他の罪を生むの不幸に陥れり。我等は神のみ心に從はずして、おのれの意志に頼らば、罪より罪に陥るの外なきを知るべし。アブラムはおのが身に恥辱を蒙りて、神を知らぬものにさへ、卑しめらるゝに至れり。これ實に神の友と呼ばれたるアブラムにとりて一大恨事といはざるべからず。箴言三〇五—七　以賽亞書卅〇廿一。詩篇卅二〇八—十。

●五日　創世記十三〇一—九。

アブラムはかの苦き経験によりて、果しておのれを益せしや。彼はその罪を悔ゐしや。三、四節。彼が壇のある處に歸り來れるを注意すべし。彼が埃及に下りゆく時に、我等は『壇』『エホバの名を頌ぶ』などの語を讀まざりき。彼今やロトと相離れんとす。神の彼に命じ給ふ處は次の如くなりき、曰く、『なんぢの國を出で、なんぢの親族を離れよ』。故に彼はウルの地を去りて、テラや、ハランと離るゝを以て足れりとすべからず、尚ほ進んでロトとも離れざるべからず。我等は一たび罪に陥ゐるとも、自らその罪を認めて悔ゐ、更にひときは高潔なる生活に進むことを得ば、また以て神の恩寵を空しくせざるを得べし。悔改の後、彼がロトに對する心のやさしさを見

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

るべし。
アブラムが正しき道より迷へる時にも、尚ほ神は彼をめぐみ給ひぬ。二節。埃及より來れる時に、彼は『甚だ家畜と金銀に富めり』。詩百三〇十一十八。

●六日　創世記十三〇十一十三。
ロトはおのが一身のために、自ら選ぶの自由を得たるを喜び、『目をあげて』灌漑の便ある低地をとれり。かくてアブラムと別れ、ソドムの方へその天幕を移せり。ロトはソドム人の惡くして、エホバの前に大なる罪あることを心にかけず、ひたすらおのが身の富みさかえんことを望みたり。
年わかき信者にして、今日かゝる地位に立てるもの極めて多し。彼等は想ふ、われ大に爲す處ありて以て資産を造り、名聲を高くすべき機會を得べしとかくて彼等は信者の友を棄て、自ら暗黑の裡に投じてその光となり、世界の進歩發達を計り、天に於ても、地に於ても、等しくおのが富貴を蓄へんと欲す

されどかく一たび墮落の途にさしかかりては、何時しか當初の志を失ひて、只唯罪惡を働くに終るのみ請ふ、かくの如きものをして、かのダニエルがバビロンに赴き、ヨセフがエヂプトに往ける時、いづれもよく安全なるを得たるは、これ神の彼等を導き給ひしに由るものなることを記せしめよ。我等若し自らこの浮世に交ることを求めば、危きこととこれより甚しきはなし。創世記卅九〇一一九、十九一廿三を研究すべし。この數節の中に『エホバ彼と共にゐませり』の語を見ること甚だ多し。これ實に安心立命の基也。

●七日　創世記十三〇十四一十八。
神がアブラムに語り給ひしは如何なる時ぞ。我等は神の禁じ給ふものを携へて、これを棄つることと能はざるがために、神のみ聲をきゝ洩すこと、その幾回なるを知らず。『彼目を擧ぐ』。十節と十四節とをくらべ見よ。ロトはおのれの心より『その目を擧げ』、他の指導を求むることなく、自らその欲する處を選

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

べり。されどアブラムは神のみ聲のいづるを待ちてその『目を擧擧げ』神の與へ給ふ處のものを得たり彼は實に驚くべき約束を與へられたり。十四、十五節。いかに約束の區域の廣大にして、その到達の遼遠なるかを見るべし。以弗所書三〇十四ー廿一と哥林多前書二〇九とをくらべ見るべし。

人としての立場よりいへば、アブラムはすべての事物について、自ら撰擇するの權を有したり。されど彼が神を信ずるの厚き、神もしわれに與へんと欲し給はゞ、必ずこれを惠み給ふべしと信じたり。これに反して、我等はその信仰の薄弱なるがために、その爲すところの事業榮えゆくにあらずんば、多くは失意落膽するを免れず。我等はその事業を全く神の指導に任ずることを敢てせざるが故に、神の與へんと欲し給ふ祝福を受くるの機を逸すること甚だ多し詩篇一〇を研究して、たゞしきアブラムと惡しきロトとを比較すべし。

●八日　創世記十四〇一ー十六。

ロトはおのれの撰擇について、幾回かその先見の明ありしを喜びたるや疑なし。彼はしばしその豊けき土地財産を以て樂しむことを得たり。彼の周圍には奸惡の人に滿ちしかど、ロトはかゝることに心も留めず、偏に蓄財の計をなしぬ。然るにアブラムは倚ほ未だおのれの領内に入ることを得ざりき。この地たるや、神がアブラムに與へんと約し給へるのみにて未だ彼の所有となれるにあらざりしを以て也。ロト自ら謂らく、アブラムの如く神のみ旨に從ふことを待たずして、わが意の向ふ處に從ひしは、その明到底彼の及ぶ處にあらずと。今や世上の人、ロトと見を同うするもの甚だ尠しとせず。されどロトが味ひつゝありし甘美なる杯には、間もなくにがき滓物の生ぜしを知らずや。ロトが身に襲ひ來れる災害は果して何物なりしや。十一ー十二節。我等は惡人と事を共にせば、また等しくその不幸をも分たざるべからず。かの時ロトの不幸を見て、進んでこれを扶け得たりしものは誰ぞや。アブラムがこの我慾なる

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

甥を助けたるは、果してその當を得たりとすべきか我等若しかゝる場合に臨まば、如何なる態度に出づべきや。基督ならんには、いかに處置し給ふべきや路加傳十五〇四、五、十一ー卅二。

●九日　創世記十四〇十七ー廿四。

アブラムが勝を得て歸れる時、彼が會せし二人の王は如何なるものなりしや。彼等は如何なる二國を代表せしや。メルキセデクについて、世に知らるゝ處は何ぞや。希伯來書七〇一ー十七。

アブラムがソドムの王に答ふるに當りて、メルキセデクの言を用ゐたるを見よ、『天地の主なる至高き神エホバ』。ソドムの王は自ら謂らく、われ强き新同盟者を得たり、而してこれとその獲物を相分つべしと。然るにアブラムは王の同盟者にあらずして、『天地の主なる』神の僕として、王と相衝突するに至れり。彼はおのが利益のためにあらず、その甥のために戰を開きぬ。我等も自ら神の子たる意識を有する時には、惡人の賄賂をうくるが如き惑に陷ることなし。基督の誘惑とくらべ見よ。路加傳四〇五ー七。今やアブラムが全く神に信賴して、また絕えてこの世の富榮を欲するの意なきを見るべし。彼は一本の絲をも、また鞋帶をもこの王より取ることをせず。ロトと相別れし時に、彼は初めてこの世を棄てゝ、神に歸するを得たり。見るべし、彼がロトの急を援はんがために、惡人の中に入りし時、何等の害をも蒙らざりき。埃及に於ける失敗に鑑みて、アブラムは堅確なる進境に入り、神の友なる信仰の勝者として立つことを得るに至れり。以弗所書六〇十六、約翰第一書五〇四。

●十日　創世記十五〇一ー七。

神の信者は、しば〳〵惡魔の襲ふに委せられて、遂には最後の勝利者となる。アブラムが神の約束を得て以來、既に十有餘年の星霜を經たり、而かも未だその約束の實現せらるる徵もなし。さればアブラハムも今に至りて、神は果してわが嘗て思ひゐたりし程の祝福を與へ給ふべきや否やを疑ふに至りぬ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

主はその僕の心を知りて、これを慰撫せんと自ら備へ給ひぬ。げに神はやさしく、愛すべきわれらの主也。『懼るゝ勿れ』とは、我等が聖書の中にしば〳〵見る處なるが、この時の語こそ、神が同語を用ゐ給ひし始めとなす。彼は何故に懼れざるべきか、『われは汝の干櫓（だて）』なれば也。アブラムは仰いで神を望めり。彼自身に在りても、またその周圍に在りても、絶えて彼に勇氣を與ふべき便もなく、只賴む處のものは神のみなりき。請ふ、我等は玆にしばらく歩をとゞめて、試に詩九十一篇を讀み、以て聖書の中に散在せる『懼るゝ勿れ』の語より得來るべき慰籍の力を我等の心にうくべし。『我等は日毎に危きに立てり、されど神のみ心を爲すあらば、世に懼るゝに足るものなし。神我等を顧みたまへば、誰かわれを害はんや』。以賽亞書五十四〇十七。

●十一日　創世記十五〇一―七。

『汝の賚は甚だ大なるべし』。神の與へたまふ最善最大の賜は、神自身なりとす。我等にして友を失ふ時孤獨寂寥の情に堪へざるものあるか、或は一生の志蹉躓することあるか、よしこれありとも、我等にして神と共にあらば、また何をか憂へんや。神は我等を導き、我等を富まし、我等を安んぜしめ給ふ。『懼るゝ勿れ、我は汝の干櫓なり。汝の賚は甚だ大なるべし』。この力あることばはアブラムをして大に神に近づくことを得しめたり。彼は神の恩愛と同情とを感得してその心を拔き、おのが疑も、またおのがおそれをも悉く神に告ぐを得たり。かくの如く、我等がおのれの心を神に任せつゝある間は、よく安全なるを得る也。神はアブラムを叱せず、また彼と爭はず、只彼を外に携へ出し、かなたのみ空を指していひ給はく、『星を數へよ』と。アブラムは數しれぬ星くづの輝けるを望みしが、廣大なる空のさまと、靜穏なる夜のいろとは、等しく彼の心にしみ渡りて、今更いたく神の力を感ずるに至れり。この時、神は彼の靈魂にやどり給ひぬ。アブラム既に神を信ず、神の彼を義とし給へるは、誠にこれに因れり。かつ彼

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

が神の友とよばるゝ所以もまた玆にありといふべし人間の眼を以て見れば、世事悉くその約束と違ふ。されどアブラムに於ては然らず、彼の信仰は非常の力を以て、神を獲取するを得たり。羅馬書四〇十九ー廿二。希伯來書十一〇六。

●十二日　創世記十五〇七ー十八

『我いかにしてわが之を有つを知るべきや』。アブラムは約束の徵を求めたり。神は彼のよわきを忍びて遂にその求むる處のものを與へ給へり。我等も神に近づきて、その心の戶を披かば、神はおのれを我等に示し給ふべし。アブラムは神の命じ給へる處のものを爲して、神がおのれを現はし給ふを待てり。刻一刻、時は過ぎゆけども、神はことばを出し給はずいつしか鳥來りて犧牲を喰はんとするをもて、アブラムこれを逐ひはらへり。十一節と馬太傳十三〇四とをくらべ見るべし。我等も神に祈らんとする時に心この世の妄念に惑はさるゝこと、その幾回なるを知らず。アブラムは仰いで神の現れ給ふを待ちぬ。かくの如きは、すべて我等が遭遇せざるべからざる訓練の一方法也。あゝ、神をまち望む時よ。あゝ、夢成りがたき夜よ。何とて主は來たまはぬかと疑ひまどへど益なし。否、益なきにあらず、かくしのび待てる間に、靈的生命はその建設を成就せらるゝ也されど我等は決して忍耐の帶を寬かにせざるやう心すべし。而して鳥飛び來りて我等が神にさゝげんとする供物を傷はんとすとも、これを免すべからず。

●十三日　創世記十五〇七ー十八。

日は終に山の端にかくれぬ。待ちつゝ、望みつゝ、空しく一日を過ぎし後、アブラムは疲れて眠につきぬ。この時、彼は大なる暗黑を覺えて懼れたり。暗黑の裡に神の聲あり、あゝ、アブハムがかく久しく待ちのぞみし尊き約束に對し、神は今何事を以て彼に豫告せんとし給ふぞ。彼が播きし種子は地にはびこりて榮ゆべし。されどそは何れの時ぞ。第一ー異國に於ける四百年の服役をなしー次にアブラムの死後久うして、彼の子孫はその領內に歸るべかりし也

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

かく待ちのぞみし神のめぐみの與へらるゝ日の、アブラムにとりてはいかばかり耐へがたく思はれけん若しそれ彼の眼に、失望の苦涙を認むるものありとも、誰かこれを怪しむものあらんや。我等の淺見なる、かゝる約束を得ば、殆んど賴むに足らずとせんされど、神は永遠の計をなし給ふことを知るべし。詩篇九十〇四。

　この失望は、アブラムをして永遠の富を得しめたり。彼にして若しこの懼るべき暗黑の裡を通過せざりしならんには、後來かく毅然として信仰の試煉に耐ふることを得ざりしや明也。彼がこの暗黑の裡に立ちて、よく安全なるを得たりしは、神彼と共にありて、彼と契約し給ひしが故也。

●十四日　創世記十六〇一―十六

　我等はアブラムが經驗に經驗を積み來れるを見たり。而してこれらの經驗たるや、信仰の強くして、肉情の弱きを知らしむ。神に賴る時には強く、己を思ふ時には弱し。アブラムはたしかに人也。彼の經驗は、我等が一生の歷史を描けるものと見るべし。人事盛衰の痕、歷々として徵すべきにあらずや。本章に於て、我等は再び弱き人なるアブラムを見る。彼サライの言を聞く。これまで神より明確なる啓示を蒙れるアブラムにして、善惡の差別をもわきまへぬ妻のことばに從ふ。何故彼はこれに從ひしぞ。則ちその言のおのが希望に相適したるものありしを以て也。これ心の罪にして、人をして破滅の境に陷らしむ。馬可傳七〇廿一―廿三。ソドムの王が導かんとしたる誘惑に對しては、斷然これを斥けながら、今やサライの言に接しては、平然これに從ふ、心すべきことならずや。請ふ我等をしておのれを誇らしむること勿れ。我等が勝ち得たる誘惑に對し、他人のこれに陷りたるを見て、我は、彼より優れりなど思ふことなく、常におのが身邊にまつはる罪に對して自ら衞る處なかるべからず。心をとめて本章を讀むべし。この時に於けるアブラムの罪を以て、神はこれを憎み、特に彼を罰し給ひしことは、聖書の中に

記されざれど、これによりて、アブラム、サライ、ハガル及びイシュマエルが、多大の憂を與へられたるや知るべきのみ。罪は我等の生涯の裡に働きて、その惡果を結ばずんば止まず。されば罪を犯すものの、その苦をうくるは當然也。

●十五日　創世記十七〇一―十四。

イシュマエルが生れたる後、神が再びアブラムに言ひ給ふまで、多く年所を經たり。アブラムの罪は約束の履行を遷延せしめたりや。何故イスラエル人が埃及を出で、カナンの地に行くに、四十年の久しきを要せしや。

神はいかなる命をアブラムに與へ給ひしや。一節。この節の『我は全能の神なり』と、十五章一節に於ける『我は汝の干櫓なり』とを比較すべし。我等はいかにして神の命に從ふ力を得べきや。アブラムの名は何と變せられしや。新しき名の意味は何ぞ。アブラハムは神の前に俯伏し、心をとめてそのみことばを伺ひ、その昔神よりうけたる約束を、今再びこに聞けり。されば彼に於ては、最早一點の疑念なくして、そのみことばと契約とをうけたり。契約のしるしは割禮なりき。割禮とはこの世と絶ち、きよき生活をなすの意也。アブラハム及びその子孫たるものは、みな脫俗の生活を爲さゞるべからず。哥林多後書六〇十七―十八。

●十六日　創世記十七〇十五―廿七。

かくてサライは今初めて一つの約束を得たり。然るにこの約束たるや、二十五年前、アブラハムに與へられたるもの也、然るを今再びこれを得んとは、神の直接なる奇蹟に由るにあらざれば、到底これを信ずることを得ず。羅馬書四〇十八―廿一。アブラハムたるもの、宜しく神の全能なることを知らざるべからず。彼は人爲の手段によりて、神の約束の完うせられんことを求めたり、されど神はこれを卻けて、約束を完うするの力のおのれに存することを示し給へり。羅馬書四〇廿によりて見れば、この時アブラハムが俯して晒ひたりとあるは、後サラの時に於け

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

るが如く、決して不信の心より出でたるにあらずして、歡喜の餘に表はれたるものなるを知るべし。約翰傳八〇五十六と詩篇百廿六〇二―三とを比較すべし。されどアブラハムはこの大なる約束をうくる間にも、イシユマエルを忘れざりき。彼はイシユマエルを愛し、これをしてまた等しく祝福を得しめんと欲したり。神がアブラハムに對して默し給へる年月の間、彼はイシユマエルによりて、約束の完うせらるべきを思ひ、この罪の子を親しく愛するに至れり。されど神の備へ給ふ祝福は、アブラハムの豫期にもまして大なるものありしを知り、彼心をこめてイシユマエルのために祈りければ、神これを聽きてイシユマエルをも祝し給へり。イシユマエルの子孫は亞剌比亞人也。さればモハメット教信者はイシユマエルの父アブラハムを以てその先祖となせり。

●十七日　創世記十八〇一―十五。

舊約時代に於て、救主イエス、キリストは神と共に天にゐまし給へり。アブラハムはそのキリストなることを知らずして、大に彼を歡待したりと信ぜらる。希伯來書十三〇二。

アブラハムよろこばしき消息を齎して家に入る、サラこれを聞きて、はじめはよろこびしかど、これを信ずることを得ず。イエスは主に爲しがたき事あらんやといひて、サラの不信を叱し給へり。エレミヤこのことにつきて、その書卅二〇十七に記せり。若し主の爲しがたき處なきを信ずるを得ば、我等は實に勝利の一生涯を送るに至らん。『懼るゝ勿れ』と『我は全能の神なり』とは、等しく我等に與へらるゝ福音也。千艱萬難、わが前に横はるに當りては、思はず戰慄するもの也。或は友のために祈りて、待つこと數年なるも悔改せずば、遂にその救ふ能はざるを感ずることあり。或は罪と奮鬪するも、後力つきて自ら勝つ能はざるを感ずることあり。基督の如く、自らすべての思想を從順ならしむることは、中々に難し。されど神と共にある時は、すべての事成らざるはなし。我等が生活の上に、神のめぐみの働を妨

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ぐるものは、我等の不信也。

●十八日　創世記十八〇十七―卅三。

本章の前半に於ては、アブラハム主と饗宴を共にして、天國のよろこびを得たるを述べ、これが後半に於ては、神怒罪深きソドム及びゴモラの上に降らんとするを示す。二個の王國。馬太傳廿五〇卅一―四十六を見るべし。本章十七節に於て、アブラハムは神の友として立てり。約翰傳七〇十七。十五〇十五―十六。詩篇廿五〇十四。アブラハムは神の友として一つの特權―特種の働を有せり。彼は救はれざるもの丶ために祈れり。この働は、また今日の信者の爲すべき所也。パウロの祈禱を研究せば、彼が他人のために神に懇求せる痕を見るべし。されど神と共に力を有たんと欲せば、また神と共に正しからざるべからず我等は祈るべき事柄を知らんがために、おのが心に聖靈を充たさゞるべからず。アブラハムの祈禱は謙遜の念を表せり、廿七、卅二節。我等はこの祈禱を讀むに一分時をも費さゞれど、アブラハムはこれをなすに數時間を要したるや疑なし。かくの如く、我等もふかく神と交通せざるべからず。彼の祈禱は不撓不屈の祈禱也。彼は一の懇求の容れられたる時に更に信仰の力を得て、次ぐに他の懇求を以てせり。彼の祈禱は應へられしや。創世記十九〇廿九。神は彼を導き、いよ〳〵進んで、層一層、大なる祝福を祈らしめ給へり。我等は祈る處少きが故に、得る處もまた少し。市中十人の義者あらんには、全市全く滅亡を免るべかりし也。げに基督教信者は『地の鹽』也。かの忍耐の心なき僕等はしば〳〵稗子(からすむぎ)を拔きあつむべきかを問へり。されどたゞしき主の答は、『否、おそらくは爾曹稗子(からすむぎ)を拔きあつめんとて、麥をも共に拔くべし』。神は聖者の義を祝して、啻に彼一人のみならず、彼と共にある人々をも、かく爲し給ふ。

●十九日　創世記廿〇一―十八。

本章は不思義なる記事を掲げたり。請ふ、この記事より良訓を得べし。第一―罪の性質が、いかに我

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

等に固着せるかを敎ふ。アブラハムは神と共にありて、驚くべき經驗を得たる後、三十年前、彼が深く懺悔したる罪を、今またこゝに犯すに至れり。十二〇十一―廿。第二―アブラハムの罪は、全能なる神の友たる彼をして異國の王の前に身を卑くせしめたり。この場合に於て、アビメレクは實際アブラハムより一層強固なる、一層善良なる性情を有せるが如し。九、十節。我等は性情に於て、異邦人と何の異なる所なし。只我等がうけ得る恩寵によりて、彼等に勝れるを覺る。羅馬書十一〇十九―廿。

されど信者たるアブラハムは、その弱き時にも、強き不信者の上位に置かる。七、十七節。アブラハムは弱くして罪に陷れりといへども、尙は彼は神のみ倉の鍵を有ちぬ。彼の信仰は尙は神を抱けり。されば我等は聖書の中にこれを認むべからざれど、神がアブラハムの祈禱をきゝ納れ給ふに先ち、彼はおのが罪を悔ゐて、赦免を得たるや疑なし。

●二十日　創世記廿一〇一―八。

こゝに至つて、約束の一部成れるを見る。即ち神が初めてアブラハムに約束を與へ給へる後、二十五年を經て、遂にアブラハムとサラとの間に、一人の子生れたり。希伯來書十一〇十一。をり〳〵に與へられし神の約束を心して讀むべし。また次の各句を比べみるべし―創世記十二〇一―三。十五〇一―七十三―十六。十七〇一―十四。十八〇十―十三。久しく待ちのぞみし約束の成るに及びて、アブラハムの一家はいたくも歡びたり。約束の期長くして、いがばかり忍びがたく覺えられしぞ。アブラハムが唯々として神に從はず、時に逡巡することなきを免れざりしは、いかなる場合なりしか、心して研究すべし。アブラハムにして、若し全くその國と家族とを棄てたりとせば、彼に關する事歷は、今我等が知れる處と非常の相異を見るべきや明也。發達鈍き我等の心靈は、失敗を經て、初めて全く神に從ふに至る。

●廿一日　創世記廿一〇九―廿一。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

アブラハム罪を犯して幾年、後彼これがために苦まざるを得ざりき。平和なる彼の家は、今や爭鬪の塲に化せり、彼これがためにいたく憂へたり。十、十一節。アブラハムおのが罪の子たるイシユマエルを愛し、これを留めんことを欲したれど、ハガルのこれと共にあると、またわが家に子あるとを以ていたくおのが信仰の生涯を妨げられ、止むなくこの母子を逐はざるべからざるに至りぬ。彼は心大に憂へしかど、『朝夙に起きて』、神の命に從ひぬ。我等若しアブラハムの信仰を有たんと欲せば、彼とおなじき道をふみ、おなじき苦を嘗め、我等がいかに自ら寵愛するものといへども、若しおのが心靈の發達を妨げなば、これを棄つるに遲疑すべからず。馬太傳五〇廿九、卅を見よ。また加拉太書四〇廿二―卅一を研究して、神が特に我等に敎へんと欲し給ふ處を知るべし。

●廿二日　創世記廿一〇廿二―卅四。

アブラハムがこの地に於て、きよき生活を送りし證據は何ぞや。廿二節。請ふ、我等もまたきよき生活を送り、おのが周圍の人々をして、我等のうちに宿れる基督のうるはしさを認め、かつ我等と相交るの高尙にして、かつ有益なるを知らしむべし。詩篇八十六〇十七。撒加利亞書八〇廿三。約翰第一書一〇三。

アブラハムは永遠に在す神、即ちエホバのみ名を頌べり。卅三節。彼はこの靜かなる場所にありて、その身に及ばんとする大試煉に備ふる處あるが如し。

●廿三日　創世記廿二〇一―六。

この一段は、アブラハムの信仰に對する二つなき試煉を描けるもの也。請ふ我等をしてしばしこゝに歩を止め、本章に示されたる深味を解せんがために特に聖靈のみちびきを求めしめよ。イサクの出生はアブラハムが久しく待ちのぞみし所なるを思ふべし而していよ〳〵これが出生を見るに及びては、一家のよろこび類ふものなく、これによりてイシユマエルも退けらるゝに至れり。すべての希望はイサクの上に集注せられたり。彼はいま『アブラハムよ』と

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

よび給へる神のみ聲を聞けり。然り、まがふ方なき神のみ聲也。アブラハムを召したまふみ聲也。彼は新しき祝福、新しき約束の下らんことを望みて待てり。再三くり返して二節を讀むべし、而してこの言のアブラハムに對するものなるを知るべし。彼は神の命を聞きてつぶやかざりき。かつてイシユマエルを逐ひし時と同じく、朝夙に起きいでたり。されど彼がその命に從ふ時、いかに失望したりしや、察するに難からず。彼は特に神の與へ給へるイサクといへども、神にまさりてこれを愛むべからず、彼はよろこんでこれをも献げざるべからず。これ實に苦痛の最も大なるものにあらずして何ぞや。特別なる意味に於て彼はこゝに神の友となれる也。約翰傳三〇十六。羅馬書八〇卅二。イサクは、かの自ら十字架を負ひし基督の型(かた)となれり。本章六と約翰傳十九〇十七とを比較せよ。

●廿四日　創世記廿二〇七—十一。

　アブラハムは十七章十九—廿一節に於ける約束を知りながら、いかにして本章に於ける神の命を諒解するを得たりしや。羅馬書十一〇十七—十九これ即ち彼が神—全能の神—永遠に在す神に前する勝利的信仰に據るものにして、彼はその愛子を燔祭の羔となさんがために、三日の間進みゆけり。彼がイサクの問に答へて、神自ら燔祭の羔を備へたまんといふことを得たりしは、彼の信仰によれる也。また彼が靜にこゝろを用ゐて準備を遂げ、而して唯一の愛子を携へて、これを縛り、これを壇の上に置き、手をのべて刀を執ることを得たるは、即ち彼の大なる信仰によれる也。彼はその子を宰(ころ)さんがために親しく刀を執れる時、神がある方法をもて、この恐るべき處置を免れしめ給はんといふが如き希望をうち棄てたるや疑なし。我等が限りなき祝福を充分に享受し得ざるは、おのが信仰の薄弱にして、すべての事に當りて、最後まで忍ぶこと能はざるがため也
さてアブラハムの献物は完うせられたり。彼は神の訓練に與りて、幾多の歳月を經、今やその全身全靈

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

を擧げて、これを神に任かせ、畢生の目的物として只神あることを知るのみ。請ふ我等はこの邊の消息を深く味はんことを要す。雅各書二〇廿三。

●廿五日　創世記廿二〇十二―十四。

我等はまたき服從の心を以て、おのが有する最善最貴のものを神に献ぐる時に、神は恰も黄金をふきわくるが如くにして、その献物を我等に返し給ふ。されど我等が神の救を求めて、その熱心極點に達せざれば、神はこれを我等のためにとゝのへ給はざることあり。されどアブラハムの如く、我等が己れを神に任かする時には、その祝福を享くべきや疑なしアブラハムが刀をとり持ちて、壇上に縛られたるその子に向つて手を擧げし時、彼はおのが生命よりも愛せるその子を全く神に任かせたり。この一刹那に於て、神のみ聲はアブラハムの耳に達せり、曰く『汝の手を童子に按くる勿れ……その獨子をも我がために惜まざれば、我今汝が神を畏るるを知る』。アブラハムはこれを聞き、歡極つてその眼を擧げ、牡綿羊の林中に備へあるを見る。彼ははじめにイサクに向つて『神自ら燔祭の羔を備へ給はん』といひつゝも、自ら全くその意味を了解せず、只かく信じゐたりしのみなるが、神は果してその如くなし給へり。

●廿六日　創世記廿二〇十二―十四。

アブラハムのなせし處を考ふれば、人はその信仰によりて、いかに大なる犧牲を献げ得るものなるやを知るに足るべし。また神の愛は、人をして全くこれに任かせしめ得るものなるを知るべし。また我等はこの一事により、約翰傳三〇十六に示せる神の愛について、新して意義を發見するを得べし。

この一段を研究する時に、アブラハムの如きは、我等と同じく、否、その靈的修養に富める我等よりも、一層その性情の弱きものなりしを記臆せざるべからず。この物語は、何のために記されしや。心して讀むべし。聖靈我等を導きて、その眞理を悟らしめ給へ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

我等はかくの如く神を愛するか。我等はその理をわきまへずして、おのが手にある最愛最善のものを献げ得るか。一方にはわが最も親しき友人、わが最も欲する希望あり、而して他方には神ゐまし給ふとせよ、我等は果して前者を棄てゝ、後者に就くことを得るか。神はこれを求め給ふ也。我にまさりて、その父母兒女を愛するものは、我にかなはざるもの也。請ふ、我等は神に祈りて、かかるまつたき服從の境に達し、而して我等の存在も、我等の所有も、やさしく、いとしき恩願を垂れ、かつ我等が慕ひまつらんことを求め給ふ神に悉く任せざるべからず。

●廿七日　創世記廿二〇十五—十九。

アブラハムはその心に於て、イサクを以てまつたき獻物となせり。神の彼に求め給ひしものは只これのみ。神の見て以てよろこび給ふ處のものは、我等の苦痛にあらずして、我等の勝利にあり。神は我等が自我を滅さずんば、到底まことの悦樂を味ひ得ざることを知り給ふ。我等の苦痛は、自我を生かさんとする煩悶より來る。アブラハムは久しく煩悶の理に苦む毎に、終にはいつも勝利を博するを得たり。彼はウルの地を離れ、テラ、ロトイシユトユルと別れいままたこの最愛の子と別る。されど全心を擧げて神を愛したる彼にとりては、何物も神に代ふべきものなりき。かくて神のみ聲は、いま明かに、かつ鋭く彼の耳に響きたり、曰く『我己を指して誓ふ、汝この事をなし、汝の獨子を惜まざりしに因りて……汝わが言に遵ひたるに因りて』。撒母耳前書十五〇廿二。前程雲深くして、路嶮なりといへども、恐るゝことなく進みゆくものは、神これを導き給はぬといふことなし。馬太傳廿二〇卅七。馬可傳十〇廿九—卅。馬太傳十〇卅七—卅九。哥林多前書二〇九。

●廿八日　創世記廿三〇一—廿。

前章に於て、我等はアブラハムが非常の窮境に臨みて、煩悶苦闘、遂に神の友として蹶然起つに至れるを見たり。彼の經歴によりて、我等が特に學ぶべき處は、今やその終を告げたり。彼は尚ほ五十年の

間、普通の人としてその生を送れり。我等は時に老いたる聖者の風容に接して、自制、平和、穏健の氣眉宇の間に溢るゝものあるを認むれども、彼をして茲に到らしめたる精神的鍛煉に於ては、よくこれを洞見すること殆んど稀也。我等にして、かゝる老者のこゝろに宿れる克己自制の精神をしたひ求めんと欲せば、青春妙齢の時に、幾回となく煩悶苦闘の境を踏み、以て戰勝の勇者とならざるべからず。本章に於て、我等はアブラハムが年頃つれ添ひし妻の亡骸を抱いて、いたく悲嘆に沈めるを見る。彼はまたかくおのが妻とも別れざるべからず、いかで涕泣せざるを得んや。越方をおもひ續けては、不覺の涙、止めもあえず雙頰に下る。こゝろして本章を讀み、かつアブラハムが斷然として、この地に於ける人々の好意を辭せるを見よ。彼はこられの人々に敬はれ、愛せられたるを以て、妻の墓所に充つべき地の如きも、人々はこれをアブラハムに與へんと欲したるに、彼はこれを斥けて、自らその價を拂はんことを求めたり。されば彼はこの世界を代表せるこれらの人々に對て、何等の負ふ處なしといふべし。

●廿九日　創世記廿四〇一—六十七。

前章には死亡、悲嘆、埋葬の一段を見、本章には約婚のうるはしき光景に接す。アブラハムはイサクの爲めに妻を求めんとて、その僕をいづこに遣はせしや。その妻となるべきものは誰なりしや。創世記廿二〇廿三をも參看すべし。アブラハム僕に命して曰く、汝わが子の妻を選ぶに神の導を請ふべしと、而して僕がこの要務を果すに、いかに神に依頼したるかを見よ。卅三節よりいかなる教訓を得べきや。六十二—六十七節よりいかなる模範を得べきや。即ちこの一事に於て、神のみ心の滯りなく成就せられたるを見るべし。まことの結婚をなすに必要なる手續は何ぞや。以弗所書五〇廿二—廿五。

●三十日　創世記廿五〇一—十一。

アブラハムがカルデアを去りてより、今や既に一百年を經たり。即ちイサクの結婚の時よりすれば、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

正に三十五年なりとす。この三十五年間に於ける事歴は、本章數節の中に略敍せらる。我等はこゝにアブラハムを以て、まつたき人と認むること能はざるを悲む。聖書は歴史上の事實をその儘に揭ぐるもの也。かのイサクを献物としたる光榮を以て、アブラハムに關する記錄を終りたらましかばと覺ゆれど、また却つて本章に於けるが如き記事あるをもて、いよ〳〵聖書のまことなることを證するを得べし。

アブラハムはマクペラの洞穴に葬らる。これ彼が特別なる約束によりて導かれし國に於て、自ら所有せる唯一の土地なりき。廿三章に於て、アブラハムいひけるは、『我は汝等の中の賓旅也。寄居者也』と。この說と希伯來書十一〇十三とをくらべ見よ。彼は信仰によりて天國に住はんことを望めり。彼の一生涯を槪觀するに、彼は多くの間違、多くの失望をなせしかど、信仰によりて神を離れざりければ、その天國に迎へらるゝが如きは、また固より疑ふべからざる處也。

●三十一日　加拉太書三〇六―廿九。

アブラハムの研究に於て、我等は彼がのこせし事歴により、只いかにして神をよろこばすべきかを學ぶを以て滿足すべきか。若くは一步を進め、この物語に伴うて、更に緊要適切なる敎訓を得べきか。神がアブラハムになし給へる約束は即ち是也。『すべての國の民、爾に由りて福を獲ん』。この語は我等に向つて、何等の感觸をも與へざるか。加拉太書三〇十四、廿六―廿九。我等にして基督を信ぜば、我等はアブラハムの嗣子也、而して神が彼及びその子孫になし給へる約束は、我等もまたこれに與る處ある也。加拉太書三〇廿六―廿九を再讀すべし。

アブラハムは行によらず、信仰によりて義とせられたり。羅馬書四〇一―三。我等も義とせられんことを欲せば、基督に於ける信仰によりて、神と密接なる關係を保つことを勉めざるべからず。この外に義とせらるべき道なし。アブラハムが神に向つてまつたき服從を表して、イサクを献げたるが如く、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

我等も自ら愛する己を十字架につけざるべからず。かくして初めて我等のうちに基督の生き給ふを見、その結果としておのれの思想も、おのれの願望もみな神の聖旨にかなふに至らん。加拉太書二〇廿。

アブラハムの一生を按ずるに、漸次發達の跡を見る。この進歩發達は、彼がおのれの過失より得來れるもの也。我等と同じく、彼は性情弱くして罪をおかし易し、されど信仰によりておのれにうち勝ち、身を以て神に忠誠を盡すを得たり。而してこの信仰は、彼が神と共に住み、神のみことばを聞き、神のくすしきみわざを見て、その衷心に發揮せられたるもの也我等も日毎に神の敎訓をうけ、アブラハムに倣ひて我等のテラを棄て、我等のロトと別れ、我等のイシユマエルを逐ひ、我等のイサクをさへ神に献げなば彼が如き信仰を得んこと疑なし。今日我等の生活に於て、誰か我等のテラなる、誰か我等のロトなる、誰か我等のイシユマエルなる、誰か我等のイサクなる。基督に於ける信仰は、我等をして短き現在のために心を勞するよりも、長き將來のために多く慮を廻らすべきを敎ふ。神アブラハムに告げて曰く、わが土地に關する約束は、汝の死後、幾百年を經て完了せらるべしと。彼これを聞きて、その成るの日をよろこび待てり。請ふ、我等をして堅固なる基礎を築かしめよ、さらば他人その上に家を建てん。我等をして善良なる種子を播かしめよ、さらば他人來りて、これに培ひ、これを獲ることを得ん。我等は宜しく百年の大計を樹てゝ、生前その功果を見んことを欲することなく、只他日神の聖旨によりてその成就すべきことを信ずべし。アブラハムがいひし如く人生はこの世に於ける一個の過客にして、我等の故鄕は永遠の國に在る也。希伯來書十一〇十三—十六。

海のかなた

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

米國に於ける夏期會合

エッチ、エム

あけぼの〻光空を彩れば、
わが魂は眠よりさめて、
主にほまれありと叫ぶなり。

米國の美しき湖畔に立てる一大建物に於て、幾多の青年女子の前に、この讃美歌の歌はれしを記憶せる人は多かるならん。然り、この歌は、米國の諸洲に於て、毎年開かる〻盛大なる學生集會に據て愛吟するもの也。

數月の間、多くの女子學生はこの會合に出席すべき費用を調へんことを勉め、また諸學校の基督教女子青年會にては、その代表者を送るために醵金する也。而して是等の代表者は、その會合に於て得たる精神上の利益を齎して、その所屬の青年會に報告するものとす。

またこの集會の委員幹事は、知名の演説家、聖書學者の招聘に盡力し、以てこの集會をして、青年女子に有益ならしめんことを計る。而して是等の講演者は多く有名なる牧師、學校長、大學教授、及び外國傳道に從事したる人々にして、出席者もまた米國、加奈陀の各州より來れる熱心なる代表的學生のみなれば、講演者にとりても、この依賴を無上の榮譽となす也。これらの代表者は、程なく幾百千人の兒女のために、或は母となり、或は敎師となるものなれば、我等がこの將來の大任を負ふべき青年女子の爲めに祈るは、また當然のことなりとす。

是等の集會の一にして、特に南部諸洲の諸學校及びその都會の青年女子のために組織せらる〻ものは、多くはその地の學校講堂に開かれ、その他の集會は廣大なる夏期旅館(サンマーホテル)を用ゆ。凡てこれらの會合の目的は、その十日間を精神的に有益ならしむると同時に、肉體的休養を計るにあるを以て、湖畔風清き處、若くは爽快なる海邊を撰ぶ也。

毎日の目課は、各集會幹事の意見に從つて各々異れども、各幹事は亦全米國基督敎女子青年會委員會の幹事なるを以て、自から共通の方針あり。通常朝飯の前

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

後半時間は、各自の祈禱、聖書研究のために備へらる規定なり。次の第一時間は三四の聖書研究部の何れかに出席すべきものとす。その研究部には熟練なる教師ありて、聖書の眞理の啓發に勉むるのみならず、またこれが研究、教授の方法をも講義す。

第二時間は、基督教女子青年會の處理方法、即ち役員委員が各自よくその職を盡して、以て會の事務を處理整頓する方法を研究するものとす。これによりて學生の事務的性向を發達せしめ、各種の宗教的集會、聖書研究會の處理、及び他人に對する應接法、交際法等を練習し、また困窮せる學生を救濟して、これに職業を得させ、以てその修學の資を辨ぜしむる等にあり。

第三時間は、外國に於ける福音宣傳の必要を說き、以て外國傳道の希望を學生の胸中に喚起する方法を講ずるに在り。

晝食後數時間は、各自の自由にして、遠足、庭球、游泳、水浴、端艇、その他心身休養のために、種々の遊戲をなす。

五時頃に至りて、演說傍聽のため再び集合す。而してこの會合は屢々戸外に催さるゝを以て、郊外の美景は、一きは會員の心を鼓舞する助となる也。

會合の結了に近づくに及び、晩禱の一を割きて、『生涯の事業』なる問題の研究に充つ。この時、內外國の別を問はず、傳道事業に全生涯を捧げんと決心せる人々が、そのよろこばしき決心を表白するを常とす。

午後八時、一日中最も儀式的なる會合を催す。これを「プラットフォーム、ミーティング」といふ。次に靜粛なる『夜の別』の祈禱あり。これ一日中最も神聖なるものなり。

全體の代表者を各洲によりて區分し、各洲の代表者中にまた一人の幹事あり。

この會合に聘せられたる講演者、若しくば全國青年會幹事中より招待されたる人が、最後の演說をなす。次に讃美歌の獨唱あり。その後、各自數分間祈禱感謝をなし、かくして全く一日の會を終ゆ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

かくて日を經るに從ひ、靑年女子の胸中に聖靈の働顯はるゝに至れば、彼等はます／＼神を畏れ、神を愛するの念を喚起せらる、閉會前數日間に於ける午後、及び夕暮の如き各講演者、諸委員等は、靑年女子との面會に忙殺せらるる有樣にて、かゝる靑年女子の中には、全生涯を主に任せんと申出づるもあり、その朋友を主に導くべき方法を知らんことを希望するもあり、或はまた基督の救を充分に信ずるに、障害となるべき知識上の困難を訴ふるもあり。この時に當りて、年長信者の個人的談話や個人的祈禱は、彼等の信仰を持續するの困難を除去するに於て、數萬言の演說にも優りて力ある也。氣魄あり、經驗ある信者の個人的補助は、永く是等の靑年女子の胸中に留りて、彼等がこの會を去り、家庭に歸り、學校に歸り、親戚朋友と交はる間にも、その生涯をたゞ主の爲めにのみ献げんとの深遠なる目的を定めしむるに至るなり。

夏期會合を談ずるものは、また必ず同會合に於ける音樂について一言せざるを得ざるべし。

さまよへるものは、　我れにきたれ、
わが羊は、　われを畏れじ、
われは眞なる、　牧者なり、
われは眞なる、　牧者なり。

うるはしき獨吟の聲を聞きたる時、幾多の人の心はうき悲しみもとけ去るを覺ゆる也。

吹きたける、　世のあらしをば、
あまつ父、　知ろしめしつゝ、
わが暗を、　照らさせたまふ、
あまつ父、　知ろしめしつゝ、

たゞに獨吟のみならず、合唱もまた常に巧妙に歌はれ、この會合に無限の佳趣を添ふるを得。

かの美はしき湖水を眺めつゝ、『われ等が命のあらぶるを、やみなき荒波のかなたより、主ぞ呼びたまふ』と歌ふ時、主の御聲は、我等の心の奥深く響きて、永久に消えざる也。

何時しか集會の期日も盡きて、夕の離別會も來る。されど『信者の愛にて、われらの心をむすぶ瑣こそう

れしけれ」の最後の歌には常に新なる美あるを覺ゆ。
我等は世界各地にありて、共に我等の父なる神を拜
する青年女子を想ひ出で、我等數百の人のみならず、
米國、英國、印度の各學校及び都市より、遠きは日本
その他の國より數百千の青年女子が、この會合に列す
るを得る時、速かに到來せんことを祈る也。殊に世界
各國の基督敎女子青年會が、かゝる隆盛の域に進み、
主基督のみ名のます〳〵頌へられんことは、我等のひ
たすら祈るところ也。

雜錄

●横濱通信　横濱基督敎女子青年會は設立以來日未
だ淺く、會員僅に廿八名。現今の事業は、裁縫夜學校
を開きて、會員中の婦人一名毎夜二三時間づゝ裁縫
を敎授し、傍ら有益なる講話を試む。これに出席する
ものは、多く雇女の如きものにして、おのが務の餘
暇に來るものにて、目下十名內外に過ぎず。今後の
方針に就いては、昨今協議中なれども、從來よりも
更に活動を試みんことは、會員全體の希望する所也。
依て一同熱心に新會員を募り、或は資金を得んがた
めに、種々の方法を講じ、專ら本會の盛大ならんこ
とを勉めつゝある也。（關根ゑみ子）

× × × × × ×

横濱フェリス女學校基督敎女子青年會は、過去一年
間殆んど設立準備のため、格別著しき活動も出來か
ねゐたりしが、漸く四月の頃より主のみめぐみと諸
姉の盡力に依りて、盛大に赴くを得たり。
青年會中に日曜學校部、聖書研究部、矯風部、傳道
奬勵部、音樂部を設け、各部に部長を置きて、互に
その發展を計りつゝある也。日曜學校は横濱市內數
個所に設け、毎日曜毎に聖書圖解を以て敎授す。生徒
數目下百三四十人。聖書研究部はわれ等會員に大に
心靈上の糧を與へ、かつたのしき會合にて毎日曜の
夜、各八九人づゝに別れて、おなじ題意の下に一時間
研究す、矯風部は專ら校內矯風に力を注ぐ。傳道部
は目下廿四名の會員を有せり。これらは皆なその生
涯を主のため捧げ、主のみ旨をなさんと決心せるも
のにて、毎火曜の夜相會して、心を合せて同部の發
達を祈りつゝある也。（丹羽とみ子）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

the many good things already gleaned by Japan from other nations, but urged upon them that they should if possible, rectify the one great mistake which had been made in the past, which had placed too much value upon outward results instead of searching for the inward *influence* which is in reality the motive power of all.

Out of the fifty or more girls and ladies present at this meeting, thirty-three gave in their names to the Secretaries as wishing to become members or associates.

Other speeches were made, one by one of the Secretaries. I ought to mention that our two Secretaries are both teachers and with great influence; Mrs, Toba in the girls' High School, where two other teachers are also Christian, and Miss Kawano in the Normal School where one other teacher is already Christian.

Mrs. Heazlett's address on the three Christian graces was a most suitable help in the way of *finding* that heart life which the former speaker had urged upon his hearers to make it their object to obtain. Shall we not join together in prayer for all these new members and associates of the worldwide Y. W. C. A.

E. Ritson,
C. M. S. Missionary.

NOTES.

A second meeting of the new Association has been held in Tokushima at which fifty-five were present. Seventeen subscribed for the magagine.

We have just received from Miss Boyd, who was present, a report of the recent Women Students Conference at Zeist, Holland, We print it in English and next month in Japanese.

Miss Worthington and Miss Hamilton who returned to England last fall on furlough are resting in Southern Wales. They will be glad and so, indeed, shall we, when they return to us again, We wish them such a rest both physical and spiritual that their coming may be in the "fullness of the blessing of Christ."

Miss Harriet Taylor has recently resigned from the General Secretaryship of the American Committee of the Young Women's Christian Association and is in England for rest during the summer months. We are not sure at all but we hope that before she goes back again she may be able to carry out one of her cherished plans and visit the sister Associations in India, China, and Japan. Let us ask God to make her strong.

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

a Recording Secretary, Miss Baart de la Faille (of Holland); and a General Secretary, Miss Ruth Rouse. On these rests the immediate burden of responsibility for the extension and building up of women's work in the Federation, an stern is their need for all the co-operation in prayer and work that can be given them by all who are interested in this great cause.

E. I. M. Boyd,
Cambridge, England.
May 12th, 1905.

THE WORLD-WIDE Y. W. C. A, MOVEMENT.

"The whole round earth
Bound by gold chains about the
feet of God."

A Branch in connection with the Y. W. C. A. has just been started in Tokushima, in the county of Awa, Japan, and one is filled with the thought of the wonderful means for good it may be, if the real intention of this world-wide Association be carried out in its union for sympathy and prayer. The girls of Japan are far removed in bodily presence from their sisters in other lands, but as Carlyle says, "Mystical, more than magical, is that communing of soul with soul, both looking heavenward."

Our Tokushima Branch has come ints existence chiefly through the influence of some of the younger members of our church, and I think it may interest those who are still in doubt as to the advisability of starting Branches of this Association in their different fields of work, to hear of the warm reception which it has received in Tokushima.

Frist of all, from the girls. Girls from the High School, and girls from a large needle work school, and also some of the student-teachers from the Normal School, have expressed a wish to join. And not only were there a large number of these girls present at our first meeting last Saturday, but we had also the presence and support of Mr. Yamaoka, the Principal of the Girls High School.

It was not the name of an ordinary Young Women's Christian Association which had drawn Mr. Yamaoka to shew his sympathy with our undertaking, but the fact of its *world-wide* influence, and the world-wide importance of the girls of this land being banded together with those of the same aims and aspirations in other countries. The point which struck me most of all in the most interesting address which he gave, was the stress which he laid upon the necessity of all goodness and strength of character having their origin from *within*, and the impossibility of their having any permanent result if only copied from *without*. Here minded his audience of

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Japan in 1907, and in learning from the General Secretary of the Federation, Mr. J. R. Mott, of America, "the Cost of Leadership." The time between these two days was spent by the women students in their own Conference; and considering the different state of perfection between the men's and the women's work in the Federation, this was a most decided advantage.

The General Impressions of the Conference may, perhaps, be focussed under the following headings:

1. The Unity which is inherent to Christian work on an evangelical basis. The various delegates, despite all differences of home surroundings, local difficulties, language, and point of view concerning organisation or method, were unanimous as to the object of their work: that all women students are to be brought to a vital knowledge of the truth as it is in Jesus Christ.

2. The urgency of the present moment in work among women students. From the first meeting of the Women's Conference—when the Secretary, Miss Rouse, read the report of the work hitherto done by the World's Student Christian Federation for women students in particular, until the last—when the representatives of the lands without organised Christian work among women students made their appeal or the sympathy and co-operation of their fellow-students, it was evident, beyond shadow of doubt, that "the evangelisation of the world in this generation," and more especially that of the women student world, was the duty realised by everyone present.

3. The Assurance that prayer is ultimately the quickest method of accomplishing God's plan for the world. Time and again, as the discussions proceeded, were the triumphs of prayerful leaders related, and tacitly, if not expressly, held up as models, after which future triumphs were to be gained. In some countries tremendous difficulties were exposed: but never was there heard any sort of doubt that, by God's help, and in utter dependence on Him, these and all other difficulties could be overcome.

To guide the progress of work among women students during the next two years, until the next Federation Conference, a Co-operative Committee of women representatives was elected by the General Federation Committee. This is composed of one delegate from each of the organised national women student movements: America and Canada, the British Isles, Scandinavia, Holland, South Africa, India and Australia. Its executive power is vested in an Executive Committee, consisting of a Chairman, Mrs. Steinthal (of Calcutta); a Vice-Chairman, Miss R. Paxson (of America);

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

such an experience was the first World's Conference of Christian Women Student's held contemporaneously with that of the World's Student Christian Federation at Zeist, in Holland, from May 3rd to 7th, 1905.

The World's Y. W. C. A. was actually represented by its General Secretary, Miss Clarissa Spencer, but several of the thirty-two delegates from the sixteen lands represented at the Conference were intimately connected with Y. W. C. A. work as well as with that of the Student Federation, in whose behalf they were there; such were Miss Ruth Paxson and Miss Henshaw, of America; Mrs. Brockman, of Shanghai; Miss Una Saunders, of London; Dr. Richardson, of Paris; and Melle. Ribet, of Turin, Italy. The World's Y.W.C.A. can, indeed, not fail to derive a great inspiration from that wonderful gathering, nor is it without a heavy responsibility to hold up the hands of those who were present at it as they seek to carry their inspiration into effect.

The sixteen lands represented at the Conference were: America, the British Isles, Holland, Denmark, Norway, Sweden, Finland, Germany, France, Switzerland, Spain, Italy, India, China, Japan, and South Africa; and in one or other of these lands all the stages of advance reached up till now in the Christian Woman Student Movement—the stage when older Christian workers are longing that a work among women students should begin, that when a few students are inspired to begin such a work, that when a movement has been started and is struggling into power, and that when there is a great women student force at work in the academic world of the country. Representing such diversity it is natural that the delegates had a tremendous scope for discussion, and in point of fact very many and very diverse were the questions touched upon: methods of organisation, world-wide, national, local; evangelisation, Bible study, missionary study, prayer, the possibilities of the Christian Student Movement; the work done and to be done by it, all these and more were taken up. No delegate but contributed something, and no delegate but received an immeasurable inspiration from the Holy Spirit, Who had called them all together from the ends of the earth, and was showing what He would work for them and through them if they would but be willing instruments.

The first evening was spent with the Men's Conference in receiving addresses of welcome, and the last day also with the men in hearing appeals from non-Christian lands by native representatives, in making financial preparations by means of promise slips for the next World's Conference, planned to meet in

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

righteous is as the dawning light that shineth more and more unto the perfect day."

"Banishing all night! "Yes, it is the way of the wicked that is as darkness. It is sin alone that hides the Light and he who knows the blessedness of transgression forgiven and sin covered, knows also that God is Light and in Him is *no darkness at all*. How can the night linger when the sun begins to show his face? No more can shadow and gloom darken the heart when our Day-star manifests His presence.

Thank God! in Jesus Christ night comes again no more! Our morning has begun and brighter and brighter, to all eternity, brighter, shines our Sun of Righteousness. If we truly abide in Him no cloud can hide His face. In that precious chapter where Jesus talks so much about abiding He says "These things have I spoken unto you that my joy may be in you and that your joy may be made full." If my joy isn't full, if yours isn't; if we are not quite satisfied with God, if we feel that our individual life with Him is not quite what a life *with God* ought to be, how eagerly and carefully we shall hear "these things" which *He* has spoken unto us that our joy may be made *full*.

"If ye keep my commandments ye shall abide in my love; even as I have kept my Father's commandments and abide in His love."

"Oh that there were such a heart in them, that they would fear me, and keep *all* my commandments *always*, that it might be well with them and with their children forever.

THE WOMEN STUDENT'S CONFERENCE AT ZEIST, HOLLAND.

The World's Young Women's Christian Association is probably, numerically and potentially, the largest body of organised Christian workers among women in the Church. Through one or other of its sections or members there is but very little Christian work for women with which it does not come in contact, and on which in must not therefore have some influence. Its horizon is as wide as the world of young womanhood, and its interests innumerable, if the multitude of its members be taken as one entity. When one interest is shared by many of its members, it is therefore of special value to the rest to hear news of it, and when one experience has taught much to some individuals it would seen only right for them to communicate it as vividly as possible to the rest. Such an interest is the Christian student movement, and

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Young Women of Japan

Vol. II August, 1905 No. 4

ABIDING.

" Abide with me! Fast breaks the morning light,
Our Day-star rises, banishing all night.
Thou art our strength, Oh Truth that maketh free!
We would unfailingly abide in Thee.

I know Thy no fear with Thee at hand to bless,
Sin hath no power and life no wretchedness;
Health, hope, and love, in all around I see
For those who trustingly abide in Thee.

I know Presence every passing hour,
I know Thy Peace, for Thou alone art Power;
O Love Divine—abiding constantly—
I need not plead, Thou dost abide with me."

" Abide with me! Fast breaks the morning light,
Our Day-star rises, banishing all night."

So an unknown singer begins his revision of the beautiful old evening hymn,

" Abide with me! Fast falls the eventide,
The darkness deepens—Lord, with me abide."

And as you read on through the remainder of the hymn which is written above, which version seems to you to strike the truer note of the abiding life—the real walk with and in God? Do you find the best expression of what has been your share in that life in the old or in the new?

A beautiful definition of the Christian life and one to the truth of which the heart that has been born again and truly abides in Christ gives glad consent is that in Proverbs 4. 18. "The path of the

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Young Women of Japan

Vol. II August 1905 No. 4

The "Young Women of Japan" is a Bible Study Monthly for young women published by the Promoting Committee of the Young Women's Christian Association in Japan Price 50 sen a year. Four *sen*, five *rin* a copy. Address 15 Dote Sambancho Kojimachi, Tokyo.

Promoting Committee of the Young Women's Christian Association in Japan.

Miss M. A. Whitman, Chairman.	Miss L. Hamilton.
Miss H. J. Wyckoff, Secretary.	Miss K. Tristram.
Miss Ume Tsuda.	Mrs. G. S. Phelps.
Miss A. B. West.	Miss L. Zurfluh.
Mrs. G. K. Hanai.	Mrs. H. Kozaki.
Miss H. J. Worthington.	Miss H. Hirano.
Mrs. V. W. Helm.	Miss S. Ellis.
Mrs. G. M. Fisher.	Miss E. M. Soper.
Miss Kin Sato.	Miss Kawai.

Miss A. Caroline Macdonald }
Miss Theresa E. Morrison } Secretaries of the
World's Young Women's Christian Association in Japan

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

明治三十八年八月一日發行

明治三十七年五月七日第三種郵便物認可

"That ye may grow up in all things into him, who is the head, even Christ." Eph. 4. 15.

Vol. II August 1905 No. 4

YOUNG WOMEN OF JAPAN

CONTENTS.

English.

Abiding.
The Women Student's Conference at Zeist, Holland. *E. I. M. Boyd.*
The World-wide Y. W. C. A. Movement. *R. Ritson.*
Notes.

Japanese.

Editorial.
Bible Study. *C. A. Converse.*
Summer Conferences in America. *H. M.*
Miscellaneous.

15. Dote Sambancho, Kojimachi, Tokyo.

Digitized by Google

Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA